義太夫協会会報
第 107 号
平成 30 年 7 月 15 日
一般社団法人 義太夫協会 発行
〒103-0023
東京都中央区日本橋本町 3-1-6
日本橋永谷ビル 210
Tel. 03（6265）1880
Fax. 03（6265）1881
http://www.gidayu.or.jp

平成三十年度 通常総会を終えて

義太夫協会会長　原道生

去る五月二七日（日）の午後、ＪＲ神田駅前の貸会議室で、平成三十年度の通常総会が開催されました。さいわい、今年も、御出席の方々の御協力を得て、議事全般を恙なく終了させることができましたことを御報告いたします。

その時には気づかなかったことですが、来年の五月初めには、新天皇への譲位の儀が予定されており、それに伴ない改元も行なわれることになるわけですから、今回の総会は平成最後の総会であったということになるでしょう。そう思うと、多少の感慨が湧いてこないでもありませんが、本協会自体の問題ということで考えれば、この日の総会は、「平成最後」という以上に、一昨年来の懸案事項とされていた、「一般社団法人」としての定款の部分的変更という重要課題を無事にクリアすることができたという点で、重視されてしかるべき機会であったといってよいでしょう。

ところで、これまで本協会が準拠していた定款は、平成二四年四月に現在の「一般社団法人」へと移行する際に決定されたものであり、別に法的な不備が問題になっているということなのではありませんが、条項によっては、それよりさらに約半世紀以前の旧「社団法人」設立時に定められた内容・文言をそのまま引き継いでいるという部分も若干残されているために、現在の法人運営の実態にはそぐわなくなってしまっている点や、今ではあまり一般的ではなくなっている語句の使用が見受けられるなどといった事態が生じてしまっていたのでした。ですから、今回の「変更」とは、そうした部分に手直しを加え、現在あるいは今後の会の運営に際して、できるだけ違和感を覚えることの少ないものへと改めようとする試みに他なりません。

以下、紙数の都合もありますので、参考までにその実例を二つだけ紹介しておくことにいたしましょう。

まずその一つは、旧定款の場合、「正会員」となる資格の所有者、つまりプロの演奏家についての呼び方として、「専門技芸士」という名称が用いられています。けれども、このような言い方が芸能の分野で実際になされていたことがあったのかどうかは、辞書などからもわかりませんし、少なくとも、今では全く見かけることのない言葉のようなので、今回、文楽の三業の事例に倣って「技芸員」と改めることにいたしました。（因みに、この呼称はかなり早くから宝塚歌劇で使われ始め、次に文楽で採用されたということを、その道に詳しい人が教えてくれました。）

また他の一つは、総会の開催を、従来の「五月」から「六月」へと変更した点です。このことによって、毎年事務局を悩ませていた決算報告書その他の作成日程に、幾らかの余裕ができたのではないかと思われます。

最後になってしまいましたが、今回の総会では、理事の改選も行なわれました。結果は別項で御報告している通りです。なお、僭越ではありますが、会長は引き続き私が務めさせていただくこととなりました。相変わらず至らぬ所が多いこととは存じますが、理事・監事の方々のお力をお借りして、協会の発展のために努める所存でおりますので、これまで同様のご助力をお願い申し上げる次第です。

平成三十年度通常総会と役員改選報告

左記の通り平成三十年度通常総会が開催され、全ての議案が承認されました。

期日：五月二七日（日）十三時三十分から十五時三十分

会場：ＴＫＰ神田駅前ビジネスセンター会議室

第一号議案　平成二十九年度事業報告に関する件

第二号議案　平成二十九年度決算報告に関する件

第三号議案　平成三十年度事業計画案に関する件

第四号議案　平成三十年度収支予算案に関する件

第五号議案　平成三十年役員改選に関する件

第六号議案　定款変更に関する件

総会に先立ち、選挙管理委員会の立会いのもと、役員（理事）選出のための投票が行われました。選出・選任された理事七名と任期内の監事二名により、今後二年間の協会運営が行われます。

〈役職別五十音順〉

代表理事（会長）　原　道生

理事　上田悦子（竹本駒之助）
高橋孝子（竹本越孝）
立花繭子（鶴澤津賀寿）
西野宗祐（竹本弥乃太夫）
丸山あかね（鶴澤寛也）
柳瀬信吾（竹本葵太夫）
児玉　信
矢内賢二

監事

義太夫教室七十期から七一期へ

平成二九年度、義太夫教室は第七十期という節目を迎えました。三月十日（土）には深川江戸資料館で卒業発表会・ＯＢ演奏会を開催。これに合わせて「義太夫教室七十周年記念」冊子も発行（下記参照）。会場で早速熟読されるお客様の姿も見られました。

幕間には第一期生・竹本弥乃太夫と第七期生・菅野昌行氏の義太夫界への長年の貢献を称える表彰式が執り行われ、大先輩の晴れ姿に大きな拍手が送られました。

三月十七日に修了式を迎えた七十期生。これからも義太夫節との良きご縁が続くことを祈っております。

また、二月十二日（月・祝）・四月二一日（土）の一日体験教室を経て、五月二六日（土）には第七十一期がスタート。講義と実技の両方が楽しめる入門コースから、九月には実技に重点を置く実践コースに入ります。お申し込み・お問い合わせは義太夫協会事務局までお気軽にどうぞ。

「義太夫教室七十周年記念」冊子刊行事業

昭和二三年に発足した義太夫教室が平成三十年に七十周年を迎えるに当たり、普及部事業の一環として、記念冊子の刊行が企画されました。平成二八年の夏にプロジェクトチームが立ち上げられ、普及部より竹本越若・竹本素丸、応援メンバーとして鶴澤弥々・竹本越里が加わりました。

また、組版・デザインから印刷までを株式会社精興社に依頼し、プロの手によって美しい仕上がりとなりました。邦楽振興基金からの助成により、その費用を捻出できました。

こうして、平成三十年三月に記念冊子「義太夫教室七十周年記念」が完成。上段記事のとおり、卒業発表会・ＯＢ演奏会にて皆様のお目にかけることができました。ご執筆者・関係者各位に篤く御礼申し上げます。

内容面では、当初は「義太夫教室の歴史」に関する記事を中心とした構成を考えていましたが、その調査・執筆に困難がありました。そこで協会保存の資料及び、寄贈された義太夫教室生みの親・豊竹湊太夫氏の遺品、また第一期生・竹本弥乃太夫のアルバムなどから、「資料館」という形でまとめました。さらに、以前に竹本素丸が作成していた「義太夫教室年表」を、補完の上、掲載しました。「歴史」については、今後百周年に向けて残された課題となります。

「歴史」の代わりに中心的記事となったのは、「義太夫教室の思い出」です。これは、教室各期から一名の卒業生にお願いして、当時の思い出を執筆していただいたものです。皆さん大変生き生きと各期の教室の様子を書いてくださり、おかげさまで関係各所からもご好評をいただいております。とはいえ、特に初期を中心に連絡が取れなかったり、編集作業上の手違いなどもあって、掲載できていない期も多くなってしまいました。

左記に、そのうちの二期分の「義太夫教室の思い出」を掲載いたします。今後も、特に未掲載の期の卒業生の方で、思い出をお寄せいただける方がおられましたら、ぜひ協会までお送りください。

（竹本越里）

「義太夫教室の思い出」

◆五二期　島崎敏樹

義太夫教室に通っていたのは十七年ぐらい前。卒業後、数年間は稽古を続けていましたが、気づいたら〆年以上お休み状態。教室の記憶がほぼ無いので、何か手掛かりがないかと昔のメールを検索してみたら、義太夫教室のホームページが始まった年で、そこに掲載されていた義太夫教室日記の原稿が出てきました。それによると先生方は義太夫の基本のキを叩き込もうと奮闘されていた模様。女義や文楽を聴いているとき、その薫陶が役に立っている。かも。

◆六八期　小関知子

二年前、六八期生募集のチラシを見て、その年六八歳を迎える私には、何かご縁のようなものを感じ、すぐに申し込みました。若い方々と一緒に新しいことに挑戦する喜びで、赤坂の豊川稲荷に通う日々は、充実した一年でした。太棹にも興味はあったのですが、体験教室で二時間三味線を持っただけで、首から肩に掛けての筋肉痛で、腕が上げられなくなり、断念しました。もっと若い頃習えばよかった！

義太夫は本当に奥が深く「一曲上げました」というわけにはいきません。現在、月一回のペースで、竹本越孝先生の元でお稽古を続けています。私と同じ年の義太夫教室のＯＢとしてこれからもお仲間に加えていただきたいと思います。

二月公演　伝承研修発表会「絵本太功記」

平成二九年度二月の伝承発表会は、絵本太功記より、妙心寺の段、夕顔棚の段、尼ヶ崎の段、でした。

夕顔棚の段は、平成二九年六月より月一回（合計十回）豊竹嶋太夫師匠にお稽古して頂き、発表しました。

私が入会してから、このように長い時間をかけて一つの演目の研修を受けることは初めての経験でした。また、定例公演で若手だけで掛合いをすることも初めてのことで、とても良い経験になりました。

（竹本綾一）

初心者のためのレクチャー公演

女流義太夫定期公演では、初めてお越しいただくお客様にも、お気軽に公演をお楽しみ頂けるように、今年の四月より「初心者でも義太夫を楽しめるレクチャー」を始めました。

開演の三十分前から開始するこの試みは、まずは今年度三回、四・七・十一月に行います。四月のレクチャーは当日「寺子屋の段」を語った竹本土佐恵が担当いたしました。「菅原伝授手習鑑」のあらすじ以外にも、当日演奏されない段の内容、菅原道真公と雷の関係などの話にたくさんのお客様が耳を傾けて下さいました。

次回のレクチャーは七月の定期公演にて、竹本越京が担当いたします。（鶴澤弥々）

五月公演　明治百五十年

平成三十年が明治百五十年に当たることにちなみ、本年の定期公演では二回にわたって、明治期に作られた義太夫作品をお届けしています。

五月二十日（日）に紀尾井小ホールで行われた公演では、明治期の代表作の一つ「良弁杉由来」より「桜の宮物狂いの段」「二月堂の段」を上演。また、古典芸能解説者の葛西聖司氏を迎え、演目にまつわるお話をしていただきました。さすがの語り口に、お客様も引き込まれていらっしゃる様子でした。

「明治百五十年Ⅲ」は、七月二十日のお江戸日本橋亭での公演です。ご期待ください。

「ＫＡＡＴ竹本駒之助公演」全記録

神津　武男

ＫＡＡＴ神奈川芸術劇場（横浜市中区）主催の、「ＫＡＡＴ竹本駒之助公演」が十回を以て終了した。以下に、曲目・公演日を列挙する。

①二〇一三年十一月一日（金）二日（土）『和田合戦女舞鶴』三段目ノ切「市若丸初陣」
②二〇一四年二月一日（土）二日（日）『太平記忠臣講釈』七段目「書置段」
③同年十月二六日（日）二十七日（月）『恨鮫鞘』「無筆書置の段」
④二〇一五年二月二一日（土）二二日（日）『仮名手本忠臣蔵』九段目切「山科隠家の段」
⑤同年十月三一日（土）十一月一日（日）『鎌倉三代記』八ツ目切「三浦別の段」
⑥二〇一六年二月二七日（土）二十八日（日）『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家段」
⑦同年九月二二日（木祝）二三日（金）『摂州合邦辻』下の巻ノ切「合邦内の段」
⑧二〇一七年三月五日（日）六日（月）『一谷嫩軍記』三段目切「熊谷陣屋段」
⑨二〇一七年十二月二三日（土）二四日（日）『奥州安達原』三段目切「袖萩祭文の段」
⑩二〇一八年二月二四日（土）二五日（日）『義経千本桜』三段目切「すしやの段」

太夫は竹本駒之助師、三味線は鶴澤津賀寿師。①⑧が中スタジオ、ほかは大スタジオを会場としたが、本公演用に特製された舞台・客席装置は毎回変わらず、低く設えられた張り出しの浄瑠璃床・舞台を、摺鉢状の階段式の客席が百八十度取り囲んだ形。駒之助・津賀寿両師の濃密な演奏が、毎回客席を圧した。

義太夫節全曲中の頂点「山科隠家」、そして①⑥⑧⑨⑩の三段目切は、いずれも人情浄瑠璃芝居の格式でいえば紋下太夫の担う曲。①～⑩のレパートリーの広さとともに、しかも割らずに丸一段で語り切った太夫は、昭和・平成の世竹本駒之助たンだ一人。男性であるならば、紋下となった藝だと信じる。

また同じくこれを分割せずに丸一段で弾き切った三味線弾きも、昭和・平成の世に鶴澤津賀寿ただ一人と思う。説得力に富む音色の上に、このひとは掛け声の名手でもあって、その古風さは稀少である。約（つづ）まるところ、いまこの世界に竹本駒之助師・鶴澤津賀寿師の師弟あればこそ実現可能な会であった。

筆者は毎回解説・配布資料の作成を担ったが、各曲の来歴を調べ直す機会となり、毎回新しい気付きを得ることが出来た。研究者冥利に尽きる思いで、駒之助師・津賀寿師へ深甚の感謝を申し上げたい。

ＫＡＡＴ神奈川芸術劇場の真野純館長、制作の石井宏美氏を始めとする関係者各位の尽力に拠って、この歴史的な公演シリーズが実現できたことを末世の記録に留めたい。

三カ所の義太夫節、大同団結！

伝統芸能プロデューサー　小野木　豊昭

徳島県が、地域の文化資産にスポットを当て、その価値の再認識と全国への発信を目的とした「ＡＷＡ伝統芸能創造発信プロジェクト」（主催：公財・徳島県文化振興財団）がスタートした。現在でも県内各所の農村舞台では人形浄瑠璃が上演されているが、各地域の求心力として、また徳島県人のアイデンティティとしての存在感は既に稀薄と言わざるを得ないだろう。そんな中、二月四日、あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）で「新演出魁（さきがけ）浄瑠璃　るりゐろ絵巻」という公演を行った。県内ではいわゆる〝あわなる〟（傾城阿波の鳴門）の上演は恒常的ではあるが、主催財団からは趣旨に沿った新鮮な企画立案が求められた。そこで、音曲の司たる義太夫節そのものを主役に、エンターテインメントとして新演出で魅せることを目指した。

第一部は、人形浄瑠璃に造詣の深い直木賞作家・三浦しをん氏とお馴染みの古典芸能解説者・葛西聖司氏によるスペシャル対談で大いに客席を温めていただいた。続いて第二部では、浄瑠璃と映像とのコラボレーションを試みた。『義経千本桜』「すし屋の段」より大阪の竹本住蝶、豊澤住輔による素浄瑠璃、『一谷嫩軍記』「組討の段」を阿波路会・竹本友和嘉、鶴澤友勇と淡路人形座による人形浄瑠璃、そして「熊谷陣屋の段」より東京の竹本越若、鶴澤津賀寿による素浄瑠璃をリレー形式に綴

り、各浄瑠璃の間に「義経が真相を語るインタビュー映像」が挿入される…あたかも歴史ドキュメンタリーを見ているような構成である。今回は時代物浄瑠璃をとり上げ、お馴染みの源義経の人間像を浮き彫りにしつつ義太夫節の本質と面白さを伝えたいという意図を、監修をお願いした新進気鋭の演劇研究者・日置貴之氏（白百合女子大学准教授）が斬新なアイデアで彩って下さった。

数多くの芸能を支え、また自らも主役として世に受け入れられてきた義太夫節が今直面している状況に、大阪、徳島・淡路、そして東京、プロの義太夫節演奏家が〝明るく〟大同団結して向き合う姿勢に接し、こうした試みの機会創出こそ今後の課題であると感じた次第である。

明るく大同団結！

復活上演「播州皿屋舗」

私が所属する淡路人形座では平成二一年度から年に一度、上演が途絶えてしまった人形浄瑠璃の復活上演に取り組んでおり、今年でちょうど十作品目になります。

その中のひとつである「播州皿屋舗」はお菊の幽霊が登場する「青山館の段」が近代まで伝承されていましたが、文楽では昭和七年の興行を最後に、又、淡路ではおそらく昭和十年頃には上演が途絶えていました。

淡路の人形座ではこの「青山館」とともに淡路の座によって増補された早替り場面「忠太物狂の段」の上演が定着していて忠太とお菊幽霊二役の早替りが何度も繰り返され、燈籠抜けや窓抜けといったケレンの芸が駆使され、上演されていたそうです。

この早替りの場面の床本（兵庫県立歴史博物館所蔵、淡路源之丞座旧蔵浄瑠璃本）には早替りが入る部分に「カワル　お菊ニナル」というような注記もあって十回以上の早替りの指示があります。

この本をもとに大阪市立大学教授・久堀裕朗氏のご協力を得て復活し、今年の上半期に淡路、加西市、姫路市などで再演しております。

私は二世鶴澤清八コレクションの朱入り浄瑠璃本を参考に補曲、同座の鶴澤友吉が「忠太物狂の段」の作曲を担当させていただきました。毎年とても貴重な経験をさせていただいております。

せっかく復活させたこの演目をまた途絶えてしまうことのないよう続けていきたいと考えております。又、淡路の座独特の面白い演出、例えば忠臣蔵の討ち入りの場面で勘平が幽霊となり、一緒に討ち入りを果たしたりする演出を復活上演してみたいと思います。

淡路の座の特徴、首（かしら）が大きい、ケレン味がある、女性も活躍できる座である、これらのことを大切に、次の世代につなげていきたいと思います。

（鶴澤友勇）

竹本駒之助
南あわじ市名誉市民に選定

平成三十年三月七日、南あわじ市市福永出身の竹本駒之助が、南あわじ市名誉市民に選定されました。

市による紹介文では、人間国宝認定や文化功労者に選出されるなどの、芸術文化分野での高い評価のほか、東京での義太夫協会定期公演に淡路人形座の座員を招聘するなど、淡路人形浄瑠璃の継承と発展への貢献も記載されています。

なお、称号授与式及び演奏会が、七月十八日に南あわじ市中央公民館で開催されます。

石川さゆりさん芸術選奨

歌手の石川さゆりさんが、平成二九年度（第六八回）文化庁芸術選奨大衆芸能部門で、文部科学大臣賞を受賞されました。

贈賞理由には、『（略）昨年の芸能生活四五周年の節目に催された記念リサイタルでは、太鼓芸能集団「鼓童」や邦楽奏者らを多数迎え、自らも義太夫を語りながら、歌手としての「これまで」と「これから」を凝縮して見せた（略）』と記されています。

このリサイタルで演奏された新作義太夫「石川さゆり誕生奇譚」（Ｇ２作詞）は、竹本駒之助が語りを指導。作曲・三味線演奏は鶴澤寛也、口上（録音）は竹本京之助がつとめました。

心よりお祝い申し上げます。（鶴澤寛也）

国際基督教大学公開レクチャー

国際基督教大学准教授
義太夫協会理事　矢内　賢二

国際基督教大学の公開レクチャー「日本伝統芸能の世界」。一昨年・昨年に続いて、今年も六月七日に竹本越孝さん、鶴澤寛也さんにご出講いただきました。最初のインタビューでは、義太夫節との出会い、プロになるまでのいきさつなどを拝聴。伝統芸能など自分とは縁のない世界のものと思っていた学生たちは、ちょっとした興味や偶然のご縁をきっかけに芸の道に進まれることになったお二人のお話に大いに驚いたようです。

続いては舞台に上がった数名の学生が「仮名手本忠臣蔵」の「裏門の段」の語りに挑戦。初めはうつむいて恐る恐るでしたが、次第に体が温まってくると、百五十名余りの学生・お客様とともに「砕けよ破れよと」「大音声」。越孝さんと寛也さんの絶妙のコンビネーションによるご指導によって、多くの若者が義太夫節との幸福な出会いを果たしました。

神楽坂つなしょうテラス
記念碑設置

会報第百四号にてお伝え致しました東京・神楽坂の「神楽坂つなしょうテラス」に一月、「竹本綱昇ゆかりの地」の記念碑が設置されました（右図）。所在地は東京都新宿区神楽坂四―三―十一、毘沙門天近くの路地の奥にあり、レストランなどがテナントとして入っているきれいなビルです。お近くにお出かけの際は、是非ご覧になってみてください。

シリーズ人物像　第三回

丸三ハシモト株式会社(二)

日頃からお世話になっている和楽器糸の製造会社「丸三ハシモト株式会社」。今年三月にはＮＨＫ「にっぽんの芸能」で放映されたこともあり、再び滋賀県長浜市木之本町をお訪ねしました。

「石田ひかりさんには、『独楽撚（こま）り』という作業を体験していただきました。」これは繭糸（けん）の端を独楽に括（くく）り、独楽を回して糸を撚る作業。上手に回さないと仕上がりにムラが出来てしまいます。「力加減が難しいのですが、初体験なのにお上手でしたよ。」

番組では木之本の「桑酒」も紹介されていましたが、「近所の老舗の酒屋さんが素敵だということで急遽その場で撮影が決まりました」。

さっそく、天文元年（一五三二）創業、日本で五番目に古い酒蔵を持つ「山路酒造」もご案内いただきました。桑酒は米と麹と桑の葉を焼酎に漬け、みりん製造の手法で作られる一四～五度のお酒。ほんのり葉の香りのする甘めの桑酒を島崎藤村はこよなく愛し、何度も注文する手紙が残されています。

絹糸の生産に欠かせない桑と綺麗な水、そして北国街道の旅人が嗜んだ桑酒。街道沿いの町、木之本の新たな魅力に触れることが出来ました。

（鶴澤三寿々）

右：山路酒造

上：桑酒

ほんに気がメ～りヤス

（二一杯目）

年二回発行のこの会報のための原稿、お話を頂く度に何杯目（何回目）かを打ち直してから取り掛かります。

途中幾度かお休みさせていただいたことを考えあわせれば、既に十年を超えているということで、本当にメリヤスをこの杯数弾くとしたら、とうに数えるのを放棄しているはずですが、こんなつまらない文章を書き続ける自分と、それにお付き合い下さる皆々様には、ほとほと感心…失礼しました、皆様には大変「感謝」致しております。

さて、先日、ご縁ありまして、立川志の輔師匠の落語会のお手伝い～と申しましても、録音で、しかも本当に数秒みたいなことではありますが～をさせて頂きました時のことでございます。

師匠が得意とされている『中村仲蔵』。

この会報をご覧になる方や、落語に精通していらっしゃる皆々様は「よくご存じ」かもしれませんけれども、このネタを理解するのに必要な知識～歌舞伎俳優さんのヒエラルキーについての理解や、斧定九郎という役どころが、仲蔵以前はどのような扱いだったか位は、ネタの中でも触れられますが～を、それこそ師匠の名司会ぶりで続いているＮＨＫの番組よろしく、なるほどとガッテンしてもらおうということで、ネタの前に『仮名手本忠臣蔵』全編（全段）の解説を、時折芝居や台詞を交え、舞台上に芝居絵などを投影しながらなさる、というのを複数年続けておられる志の輔師匠、今年は記念すべき十年目ということで、ご自身が俳優になった体で演じられる部分に、義太夫三味線の音を入れてみよう、というご提案でした。

具体的には四段目判官切腹での「カラニ」を、それまで師匠ご自身が「ベーン」とおっしゃっていたところを、本当の義太夫の音を入れてみよう、ということで、まずは昨年の会で演じておられるビデオを拝見しますと、九寸五分を載せた三方を前にする塩冶判官を演じる志の輔師匠が、上手から義太夫三味線の音がベーン、ベーンと同じ間で聞こえてくる、というようなことを仰せでした。

我々の方からすると、やはり芝居のきっかけというか、動きや思い入れに合うように弾いているつもりなので、実はあのカラニというのは、台に足をかけたときとか、向こうを見込んだ時とかに弾いておりますというようなことをご説明したうえで、既に形の決まっている師匠の塩冶判官と力弥に合うようなカラニを録音し、音響さんにタイミングをお伝えしました。

もしストップウォッチか何かで、実際の四段目のカラニの間隔を計ったら、きっと「等間隔」ではないと思います。

その意味では「同じ間」ではないのですが、そこはさすがの志の輔師匠、前述のような説

明をさせて頂きますと、ああなるほど、そういえばそうですね、と納得していただくと同時に、私も、実際には等間隔でなくても、感覚的には等間隔と申しましょうか（漢字変換間違いそうです）つまり、あるカラニの演奏ポイントから、次の演奏ポイントまでは、息を詰めるという緊張感が漂う中で、次のカラニが入ったときに息を継ぐ、つまり「ひと息」という決まった間に芝居がはまっている、その意味では「同じ間」であるわけで、おそらくはそうした所を師匠も無意識に感じ取られてそうおっしゃっていたのだろう、さすがだなあ、と感心感服した次第です。

で、本番にもご招待頂きましたが、私がこれくらいの間がよかろう、と思って録音した音は、少々師匠の語りや動きには間が広すぎたようでした。

そうです、すっかり忘れてました。以前当欄で落語ＴＨＥムービーの話をしました時、噺家さんの語り口に合わせて口パクで芝居をする俳優さんを見ると、とても早口でしゃべっているように見える、と自分で言っていた、その時の経験を逆にして生かすべきだったことを。

もう一度チャンスを頂ければ、もっと寄り添った音が入れられるかな、と思いました。というわけで、他ジャンルとの方との交流の中で発見した、間の間隔の感覚的な違いに関する私の勘違いのお話でした。

（頭と目がチカチカしてきました…）

（歌舞伎義太夫三味線　鶴澤慎治）

【訃報】

佐佐木鍾三郎氏（元義太夫協会監事）

平成二九年九月十九日ご逝去。享年九四歳。（ご遺族のご意向により正式なご連絡は頂戴いたしておりません）

国文学の研究者、教育者として活躍される傍ら、長年にわたり義太夫協会の運営に携わられ、義太夫教室の講師としても後進育成にご尽力いただきました。

心より哀悼の意を表しますとともに、ここに謹んでお知らせ申し上げます。

竹本住太夫師匠

四月二十八日、文楽の文化勲章受章者、人間国宝の竹本住太夫お師匠様が、肺炎のため九三歳でお亡くなりになりました。

大阪の正会員は、お稽古などで大変お世話になりました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

■協会・正会員の主な動き■

平成三十年一月～六月

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催公演

「女流義太夫演奏会」

一月二十日（土）お江戸日本橋亭

二月二一日（水）国立演芸場

＊第三七回伝承者研修発表会

三月二十日（火）お江戸日本橋亭

四月二十日（金）お江戸日本橋亭

五月二十日（日）紀尾井小ホール

六月二十日（水）お江戸日本橋亭

正会員主催公演（協会後援分）

依頼公演・協力公演（＊印）

「ぎだゆう座」　お江戸上野広小路亭　二月一・二日、四月一・二日、六月一・二日

「じょぎ」　お江戸上野広小路亭　三月一・二日、五月一・二日、七月一・二日

「第四回弓弦葉の会」

一月一四日（日）紀尾井小ホール

「第二回瑠璃の会」

三月三日（土）

大阪・国立文楽劇場小ホール

「第四八回邦楽演奏会」

三月四日（日）国立劇場小劇場＊

主催：邦楽実演家団体連絡会議

「若手邦楽聴き比べ　一」

三月一二日（月）東京都美術館講堂＊

主催：邦楽実演家団体連絡会議

「第十一回花のように香れ　女流義太夫」

三月一五日（木）

蕨市立文化ホールくるる

「女流義太夫スペシャルライヴ vol.8」

三月二四日(土)・二五日(日)・二六日(月)

神楽坂ザ・グリー

「第十六回はなやぐらの会」

四月八日（日）紀尾井小ホール

「粋でおしゃれな女義ライブ其の六」
六月一七日（日）回向院

【普及】

義太夫協会主催教室

◆義太夫・三味線一日体験教室
二月十二日（月・祝）芸能花伝舎
講師　竹本越若・鶴澤弥吉
四月二一日（土）豊川稲荷文化会館
講師　竹本越孝・鶴澤駒治

文化庁委託事業義太夫教室

◆第七十期義太夫教室　実践コース後期
一月六日～三月一七日（週一日・土曜）
豊川稲荷文化会館
〈卒業発表会・ＯＢ発表会〉
三月十一日（土）　深川江戸資料館小劇場
◆第七一期義太夫教室　入門コース
講師　竹本土佐子・竹本越孝・鶴澤駒治
五月二六日～七月二一日（週二日・木曜土曜）豊川稲荷文化会館

【人材育成】

新人養成特別研修制度
研修生一名（太夫）が、研修を修了して六月より竹本綾之助に入門

【運営】

平成二九年度第三回理事会
三月三十日（金）日本橋永谷ビル会議室
平成三十年度第一回理事会
五月十一日（金）義太夫協会事務局
平成三十年度通常総会
五月二七日（日）
ＴＫＰ神田駅前ビジネスセンター会議室
平成三十年度第二回理事会
五月二七日（日）（総会終了後）
ＴＫＰ神田駅前ビジネスセンター会議室

【特別会員新規入会】

歌舞伎太郎様

【放送・放映】

◆ＮＨＫ　ＦＭラジオ『邦楽百番・選』
三月二四日「冥途の飛脚」封印切の段
浄瑠璃：竹本駒之助　三味線：鶴澤津賀寿
◆ＮＨＫ　ＦＭラジオ『邦楽のひととき』
一月三日「恋女房染分手綱」重の井子別れの段
浄瑠璃：竹本　綾之助　三味線：鶴澤津賀花
二月十四日「明烏六花曙」山名屋の段（奥）
浄瑠璃：竹本土佐恵　三味線：鶴澤駒清
五月九日「伽羅先代萩」御殿の段
浄瑠璃：竹本土佐子　三味線：鶴澤津賀花
◆ＮＨＫ　Ｅテレ『にっぽんの芸能』
一月五日「新春を寿ぐ楽の調べ」
「蘆刈」笠の段　浄瑠璃：竹本駒之助
三味線：鶴澤津賀寿　ツレ：鶴澤三寿々

■今後の協会・正会員の予定■

平成三十年七月～十二月

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催公演

「女流義太夫演奏会」
七月二十日（金）お江戸日本橋亭
八月一六日（木）国立演芸場　※若手勉強会
九月二十日（木）お江戸日本橋亭
十月二十日（土）お江戸日本橋亭
十一月二十日（火）お江戸日本橋亭
十二月一五日（土）紀尾井小ホール
「本牧亭を聴く会」（お話と音源再生）
七月三十日（月）お江戸日本橋亭

正会員主催公演（協会後援分）

依頼公演・協力公演（＊印）

「じょぎ」　お江戸上野広小路亭　七月一・二日、九月一・二日、十一月一・二日
「ぎだゆう座」　お江戸上野広小路亭　八月一・二日、十月一・二日、十二月一・二日
「つがじゅの会」七月三一日（火）
渋谷区文化総合センター大和田伝承ホール
「若手邦楽聴き比べ　二」八月二四日
東京都美術館講堂＊
「女流義太夫　涙と笑い４」九月一七日（月・祝）浅草公会堂第二集会室
「第十一回竹本土佐恵の会」
十一月三日（土・祝）内幸町ホール

【普及】

義太夫協会主催教室

◆義太夫・三味線一日体験教室
八月二五日（土）豊川稲荷文化会館
講師　竹本土佐子・鶴澤駒治

文化庁委託事業義太夫教室

◆第七一期義太夫教室
実践コース前期・後期
九月六日～平成三一年三月二一日（各木曜日）豊川稲荷文化会館
講師　竹本土佐子・竹本越孝・鶴澤駒治

依頼事業

◆学校巡回公演：文化庁主催
「芸術文化による子供の育成事業―巡回公演事業―」（制作：古典空間）
「語ってみよう！　義太夫節！」
事前ワークショップと本公演・全九校
《本公演》
九月二五日　越谷市立越谷小学校
二七日　深谷市立川本南小学校
十月二七日　北本市立中丸小学校
二九日　秩父市立南小学校
三十日　白河市立白河南中学校
三一日　須賀川市立岩瀬中学校
十一月一日　福島市立清明小学校
二日　いわき市藤間中学校
十九日　さいたま市立本太中学校

【その他事業】

床本・稽古本即売会　八月四日（土）
豊川稲荷文化会館
祖先祭　十月一三日（土）十三時　回向院

■寄付・寄贈■

平成三十年一月～六月
左記のご寄付ご寄贈を頂戴いたしました。
誠に有難うございました。
日本素義会様　五万円
桜井久子様
義太夫関連カセットテープ七三巻
竹本駒之助
三十万円、肩衣十枚、肩衣・袴十組

会報編集委員／鶴澤寛也・竹本佳之助
鶴澤賀寿・竹本駒佳・竹本越里

床本・稽古本即売会
八月四日（土）十三時～十六時
豊川稲荷文化会館三階
どなた様もお求めいただけます。
会員は一割引です。

広告募集！
本会報に掲載する広告を募集しております。一段一万円、半段五千円です。

義太夫協会会員募集！
義太夫協会主催公演の入場料が割引になるサポーターシステム（賛助会員）は常時会員募集中です。
※詳しくは義太夫協会までお問い合わせください。

７月３０日発売！　今年没後 30 年となる竹本春駒の貴重な録音

「伊賀越道中双六　岡崎の段」
「花上野誉碑　志度寺の段」

浄瑠璃　竹本春駒　三味線　鶴澤三生　　定価 1,500 円（税込）

＜義太夫協会記録音源復刻オンデマンドＣＤラインナップ＞全 11 タイトル 好評発売中！
壺坂観音霊験記・新版歌祭文・絵本太功記・御所桜堀河夜討/伊賀越道中双六・生写朝顔話・艶容女舞衣・義経千本桜・伊勢音頭恋寝刃・近頃河原達引・ひらかな盛衰記
＊各 1,500 円　ご注文から 10 日前後でお届けいたします。詞章・送料は別途となります
竹本土佐廣・鶴澤友路「心中紙屋治兵衛　河庄の段」、竹本駒之助・鶴澤津賀寿「近頃河原の達引　堀川猿廻しの段」・「嫗山姥 廓噺の段」・「源平布引滝 綿繰馬の段」も取り扱っております。
＊詳しくは義太夫協会へお問い合わせください

義太夫用三味線・張替、水牛駒・見台・湯呑、
制作修理　その他、各流三味線及び付属品
の御注文承ります。

き　む　ら

〒151-0066 東京都渋谷区西原 1-26-14
TEL/FAX 03-3466-2156
P.H.S 070-5457-5687
kimura-wanoshirabe@nifty.com

酒処
押上文庫

〒131-0045
東京都墨田区押上3-10-9
Tokyo Skytreeから徒歩8分!
TEL: 03-3617-7471
E-mail: oshiagebunco@gmail.com

床世話連中

〒162-0825
東京都新宿区神楽坂四―二―一
TEL・FAX〇三(三二六〇)五〇一二

和料理
宮しま

暑中お見舞　申し上げます

日　本　素　義　会

第109回　平成30年10月21日（日）開催
新加入 大歓迎！ふるってご参加ください
詳細は菅野昌行まで

永谷　暑中お見舞い申し上げます

お江戸上野広小路亭　お江戸日本橋亭　お江戸両国亭　新宿永谷ホール

永谷商事株式会社　代表取締役　永谷浩司

本社　〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-20-1　tel. 0422-21-1711

地域と共に歩む 不動産賃貸業

株式会社　オータカ

代表取締役　渡辺康成
常務取締役　高山早苗
専務取締役　渡辺貞稔

〒351-0011　埼玉県朝霞市本町 2-5-31
TEL 048-466-2220　FAX 048-466-2684